観光甲子園にチャレンジ

弟子屈高校総合学習

弟子屈高校(宮嶋衛次校長)の3年生が、今年度の「観光プランコンテスト『観光甲子園』」に応募しました。

観光甲子園は、神戸夙川学院大学(神戸市)などでつくる実行委員会の主催。高校生が主役となって地域をアピールし、実際に商品化を目指すことのできる「地域観光プラン」を募集するコンテストです。「観光立国日本」を担う人材育成を目指す試みの1つとして、全国の高校生を対象に平成21年度から始まり、今回が3回目の開催となりました。同校では、観光カリスマで、てしかがえこまち推進協議会アドバイザーの山田桂一郎さんを講師に迎えた観光講演会をきっかけとして着手することとなり、てしかがえこまち推進協議会のバックアップを受け、取り組みました。

3年生56人は、総合的な学習の時間を使い、地元の自然や歴史、文化に対する理解を深めるとともに、地域の観光の現状や課題、経済的な振興を考慮しながら、全12チームに分かれて、それぞれ1プランずつ、合計12プランを造成しました。プラン造成の視点は「斬新性」「地域の魅力の打ち出し、波及効果」「消費者視点」「採算性」「倫理性」の5つです。

1校からの応募が3案と規定されているため、7月1日の締め切りを目前にした6月23日、造成された12プランの校内選考会を開きました。選考会では、3年生全員と校長をはじめとする教員の皆さん、これまでプラン造成を支援してきた山田さんやてしかがえこまち推進協議会、役場観光商工課職員、㈱ツーリズムてしかが旅行業取扱者の太田さんが見守る中、各チームごとに造成したプランを丁寧にプレゼンテーションしました。役場観光商工課の松岡友之課長は「高校生の皆さんが、これほどまでに町のことを真摯(しんし)に考えてくれていることに感激しました。われわれ大人も見習わなければ」と評価しました。

関係者の前でプレゼンを行う生徒の皆さん

応募総数72校(134プラン)という中、残念ながら同校の本選出場はかないませんでしたが、学年主任の小林教諭は「今回の頑張りは、生徒たちのスキルアップはもちろん、地元のことを考えるきっかけとなった。ぜひ、町民の皆さんへ発表できる機会をつくりたい」と述べ、生徒たちの頑張りを称賛しました。また、宮嶋校長は「自分の町の観光だけではなく、将来像まで考えるまたとない機会となり、とても有意義だった。来年はぜひ本選出場を」と話し、今後の継続的な取り組みにも意欲を示しました。

アドバイザーの山田さんは「地域のことを深く考えることで、地域の本質的な魅力がより理解でき、地域への誇りの醸成につながったのでは」と、今回の取り組みの成果を実感していました。

外国人観光客に安全・安心をPR

激減している中国からの観光客を呼び戻すために6月22日、北海道運輸局や北海道などが招聘(しょうへい)した中国大手旅行会社総裁と同有力メディア視察団が北海道を視察に訪れ、本町の摩周湖にも立ち寄りました。

今回訪れたのは全3コースのうち、中国の大手旅行会社・中青旅控股股份有限公司の張立軍総裁が団長を務める、北京市、天津市、山西省の自社社員と、テレビ・新聞などの有力メディアの二行です。本町では、摩周湖第1展望台で吉備津副町長や和田淳日中友好協会長、井出雄策摩周湖観光協会副会長ら関係者が二行を出迎え、弟子屈町の安全・安心をアピールしました。

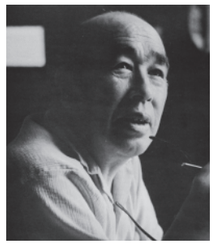
6月27日には、北海道運輸局が台湾・韓国・中国・香港・シンガポールの最重点5市場から、新聞・雑誌などのメディアを招聘。摩周湖の取材を実施しました。

第二弾では道央を取材しており、第二弾として道東を訪れたもの。新緑の美しい自然や食、スイーツ、温泉などを実際に取材し「北海道の今」を東アジアに広く発信していただくことで、風評被害の払拭(ふっしょく)を目指しました。町内の取材を終え宿泊施設に降り立った取材陣を吉備津副町長が出迎え「当町は震災の影響もなく安全・安心です。自然と温泉観光地の当町を、それぞれの国で発信してください」と訴えました。

この事業では、6~7月にかけ、道央、道東、道南、道北の4回、合計40人を招聘しています。

張総裁と関係者の一行と記念撮影

原野紀行



更科源蔵(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印

特集の内容

創刊号「じゃがいもの巻」
1巻2号「冬ごもりの巻」
3号「にしんの巻」
4号「早春の巻」
5号「百花の巻」
6号「野鳥の巻」
7号「旅の巻」
8号「祭の巻」
9号「南瓜の巻」
10号「あきあぢの巻」
11号「昔噺の巻」
12号「越年の巻」
2巻1号「お正月の巻」
2号「漁場の巻」
3号「雪どけの巻」

随筆雑誌『北方風物』

1945(昭和20)年8月15日に太平洋戦争が終わりました。札幌の古書店・尚古堂の主人・代田茂は更科に「とてもこの暗くしめっぽさに息がつまりそうだ、何か明るく温かい雑誌をつくらないか」と相談をもちかけます。更科は「儲けると思わないなら、損をしない雑誌をつくる自信があるが、…私も一年間は、無報酬でそういう雑誌をつくるのに協力しよう」(『札幌放浪記』から引用)と、終戦の2カ月後の10月から編集作業にかかりました。

誌名を『北方風物』とし、毎号特集編集の月刊で1946(昭和21)年1月に創刊しています。

更科は創刊号の編集後記に「…吾々(われわれ)はたゞこのたうたうと渦巻く激しい世の中に、世の中を忘れて手前勝手な仕事を初めたのではない。あまりにも厳しい現実であるが故(ゆえ)に、そつと温かい手を差しのべて疲れた肩をいたはりたいのだ…」と書いています。

この雑誌の編集を協力してくれた川崎昇の提案で、名前が知られていた人たちに、更科は毛筆で祈るような気持ちで原稿執筆を依頼しています。更科の呼び掛けに、柳田国男、高村光太郎、室生犀星、鶴田知也、有島生馬、坂本直行、伊藤整、高倉新一郎、百田宗治、土井晩翠、堀辰雄、宮部金吾、牧野富太郎など、当時各界で活躍していた多彩な顔ぶれの人たちが応えてくれています。

現在の感覚でいくと原稿料も相当な金額になるのでしょうが、物価が不安定で物がほとんどない時代のこと、北海道にはあったバターを更科は原稿料の代わりに送っています。これが好評で、中にはチーズを手に入れてほしいと送金してくる人もいたのです。バターの公定価格が7円のとき、闇市では100円(終戦当時)だったといいます。

『北方風物』は、それまで読んで楽しめるものを出版できなかった時代を過ごしていた人々の活字の飢えに応えるもので、好評でした。

やがて本州の出版状況がよくなり、戦時中休刊していた同じような雑誌が復刊されてきたことや、最初に約束した1年間の期間が過ぎたことから、1947(昭和22)年3月、第2巻3号、通巻15号で廃刊しました。

※引用文は原文のまま。